



書 評

私たち麻酔科医が知っておきたい 周術期の栄養管理

麻酔科外来から術後管理まで、すぐに使える栄養スキル

谷口 英喜・著

本書は、麻酔科医だけでなく、周術期管理に携わるすべての医療従事者にとっての必携書である

皆さんは、本当に“全身管理”を行っていますか？ 麻酔科学の本質は、手術による侵襲から患者を守り、その回復を助けることにありと筆者は考えています。多くの麻酔科医は、自分たちが“全身管理”を行っていると思っているかもしれませんが。しかし、実際には、横隔膜より下の管理にはあまり関心がないのではないのでしょうか？ 絶飲食やPONV（術後悪心・嘔吐）の対策を行えば、それ以上のことは必要ないと考えている方もいるかもしれません。

そんな麻酔科医に向けて、本書は手術における患者の“最適化”とは何か、これが“周術期管理”であると伝えています。周術期栄養療法やプレハビリテーションといった最新の知見を、余すことなく解説しています。

本書の著者であり、日本における周術期栄養管理の第一人者である谷口英喜先生は、すでに『術後回復を促進させる周術期実践マニュアル』（日本医療企画、2017）を出版しています。周術期管理に取り組んでいる施設では、当時画期的だったこのマニュアルを所持していると思います。この前著はマニュアルとして素晴らしいものでしたが、本書と比べると理論的な内容の言及は少なかったかもしれません。

具体的な内容を少し紹介しましょう。本書は合計13のレッスンで構成されており、周術期管理のみならず、重症化した際の栄養管理についても、理論面と実践面の両方から解説しています。Lesson0で基礎的な用語や栄養管理に必要な基本知識を説明したあと、Lesson1で術後回復力促進策、Lesson2で手術に関わる栄養管理、外来時に関し

てはLesson3で栄養評価方法、Lesson4で術前栄養介入、Lesson5でフレイルやサルコペニア、Lesson6でプレハビリテーション、Lesson7で最新のトレンドを解説します。さらに、Lesson8～10では入院後の栄養管理、Lesson11では重症化した場合の栄養療法、Lesson12では麻酔科医へのNST参加の提案といった、幅広く必要な事項が網羅されています。

日常の臨床では、術後の栄養療法は主治医任せになりがちで、周術期外来があっても手術直前に栄養介入したところで効果がない、と諦めてしまうことはありませんか？ 本書を読むことで、術前のどの時期から介入すれば効果があるのかが理解でき、適切な介入期間を見直すことができます。また、術後の管理を含めた病院全体の規定を変更する際にも役立ち、術前の炭水化物負荷や術後の早期経口摂取など、最新の知見を取り入れた最適な周術期管理を提供できるようになるでしょう。

さらに本書は、麻酔科医に対しては栄養療法の基礎知識を伝え、栄養療法に関わりやすくするとともに、NSTへの参加を促す内容です。また、麻酔科医以外の医療従事者には麻酔科医の思考プロセスや管理の意図を理解させ、栄養療法と麻酔科医の橋渡しをする役割も果たしています。

ぜひ、本書を手に取り、周術期管理だけでなく、栄養療法全般にも参加してみませんか？

（神戸市立医療センター中央市民病院麻酔科
東別府直紀）

A5判、192頁
2024年6月、定価4,400円
克誠堂出版

